天地物語

重装改

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天地物語

【Ｎコード】
Ｎ６１６７Ｙ

【作者名】
重装改

【あらすじ】
いつか、どこかでさらなる技術的進歩を遂げる事ができた人々と、できなかった人々のお話です。
※初投稿ですから文章に粗が目立つかもしれません
その時は是非ご指摘お願いします

プロローグ

いつの時代ともわからないいつか、人は様々な技術を産みだした。

大陸サイズの人工島を浮かび上がらせるほどの反重力エネルギー、太陽光と定期的なメンテナンスだけで半ば永久的に食料、エネルギーを生み出してみせるプラント施設等で生活は転機を迎え、医療面でも反老化カプセルを始めとした恩恵により、平均寿命はさらに高齢化することとなり、これらを手に入れた人々はまさにこの世の春を謳歌した。

しかし、これらの技術は、軍人、政治家やそれに追随する職業に就く者、高所得者等の特権階級に独占され、その他の人々は変わりない…いや、参政権を始めとする様々な人権の事実上の消滅や、それによる治安の悪化、何より反重力エネルギーの発生時に老廃物の形で生じる「黒い雪」による環境汚染等による生活圏の縮小で今まで以下の生活を強いられていた。

そんな中、一人の学者が新しく発案した新しい駆動システムの軍用転換へのテストの為に選ばれた島への直行便から物語は始まる…

一話（1）

何の変哲も無い旅客機が、空を飛んでいる。いや、正確には着陸のために降下を開始していた。
乗客の顔ぶれは３０代～４０代が2、３割、残りは１０代後半に見える人々が占めている。
彼等に共通していることはピリピリとした雰囲気を全身から出していること、そして胸に付いた〈天上の人〉…つまり特権階級を表すバッジである。

一方、同時刻
その旅客機を見上げる二人の人物がいた。
片方は肩までかかる髪を後ろで束ねた背の高い青年、もう片方は金髪と黒い肌が目を引く中肉中背の少年といったところか。
「博士、質問です」
少年が青年（どうやら博士と呼ばれている）を見上げて言った。
「これから来る、上の人って１００人ちょっとであってますよね？」
「そうそう。君と同じ年頃の子達はだいたい７０人かな」
博士は少年に笑いながら返す。
「全員、〈適性〉も君より上だ。それで、どうしてまたそんなことを？」
少年は頭を軽くかき、（ばつが悪いか恥ずかしいかの時に少年が無意識に行う、一種の癖である）これまた少し恥ずかしそうに答えた。
「いや、そういうわけじゃ無くて、えっと…俺は〈下の人〉だけど、その人達と仲良くなれるかな、なんて」
「つまり、差別されるのが、恐い」
「ええ、まあ…」
博士は、少し考え込んで答えた。
「わからないな、ただでさえ特権階級とただの人だ、さらにさっき

も言った通り、彼等と君とには歴然とした才能の差がある。でも…」
「でも、何です？」
「天上の人といっても人間さ、全員がそういう選民思想ではないかもしれない」
それを聞いた少年の顔は少し安心したように見えた。
「おや、着陸したね。行こうか」
「は、はい」
それでも心なしか動きがギクシャクしている少年を見て、博士は早くも不安になった。

反重力装置から排出される有害廃棄物、通称〈黒い雪〉のせいで地上に住むことを余儀なくされた人々は、巨大なドーム内に生活に必要な全てを詰め込んで閉じこもることを選んだ。しかし、ドーム自体の維持費が馬鹿にならないため天上の人に頼らざるを得ず、両者の立場の差は開き、両者の嫌悪感は深まるばかりであった。

旅客機は、島の海沿いに位置したドーム内に着陸した。
といっても、〈黒い雪〉の処理のために旅客機全体を消毒し、さらに乗客にも厳重な消毒処理を施すことになる。
結局、乗客達がロビーに解放されたのは着陸から３０分以上後のことだった。
ただでさえ地上に良い印象を抱いていなかった彼等、特に若い者達が直接的な原因が自分達にあることも棚にあげていかにも不満げな顔をしている頃、博士と少年が到着した。

一話（2）

向かってきた二人が博士と少年である事がわかると、１００数人の先頭から３０代そこそこであろう男が前に出た。
「桜田です。芦岡博士で間違いありませんね？」
「はい、よろしくお願いします」
お互いに軽い挨拶を交わすと、桜田と名乗った男が博士に不安げに質問した。
「博士」
「…何です？」
「そちらの子供は？」
博士は桜田の手の先の少年を見て、ああ、と納得したように声を出した。
「彼は、今回の計画で先だって試験に付き合ってくれたのです。名前は…」
そこで博士は急に口ごもる。心なしか視線も泳いでいる。
「…博士？」
「いや、ちょっとお待ちを。」
博士は桜田に背を向け少年に向き直る。
「…おい、俺は君のこと名前で呼んだこと無いぞ？」
「そりゃあ、名前ありませんし」
「…そうだっけ？」
「博士も博士ですよ。俺と博士の二人っきりが１０年続いたからって、何も全部〈おい〉だけですませなくても。…なんなら、今にでも付けちゃいます？」
あっけらかんという少年をよそに、博士は想定外の事態に頭を悩ませた。
「名前…名前ね。…そうだ、せっかくだから〈おい〉をなまらせてロイでどうだ？」

これに少年、
「ああ！いいですね、ロイ。」
目を輝かせて実に嬉しそうに賛同する。
「ふふふ、そうだろう。たったの二文字で覚えやすい。」
「…博士、そろそろいいですか？」
「えっ？…あ、っと」
博士は、桜田に声をかけられてやっと頭の中で自分の来た理由まで話を戻す。
「コホン、と、とにかく…テストパイロットを担当してくれたロイ君です。」
「よろしくお願いします」
「は、はあ…」
唖然とする桜田をよそに、博士は明らかに自分を変なものでも見ているような目で見ながら、ヒソヒソと話をしている人だかりを見つめると、再び視線を桜田に移してズイッと詰め寄り、小声で不満を漏らした。
「しかし、桜田さん。事前に伝わったから何とかなりましたけれど、保護者にＳＰ同伴だなんて、遠足じゃあ無いんですから…」
「す、すみません。…これでもだいぶ減っているのですよ？ただ、さすがに自分は権限が低くてですね…」
桜田は急に真面目な話…それも自分にとって痛いところを振られて少しうろたえた。
そうでなくても彼と博士の身長差は１０ｃｍ近くあるため、ズイズイ寄られるのはあまり気持ち良いものではない。
「いえいえ、こちらこそ。…そろそろ移動しましょう、これ以上待たせると皆さん、アレですから」
博士は彼の真意を知ってか知らずか、申し訳なさそうな顔をして深々と頭を下げた。
「そ、そうですね」
桜田は、話を長引かせた元凶は博士であることを指摘したかったが

それこそ面倒なことになると判断し、人だかりに向き直った。
「…では皆さん、こちらです！」
桜田、博士、ロイを先頭に約１００人が目的の施設に向かうため、リニアレールに乗る。
レールはドームの内壁に向かって移動を開始し、何かあるたびに桜田がいちいち、ドームの多重構造についてのウンチクを誰も聞きやしないのに語っていた。
振り返ってその様子を見た博士は、
「ツアーガイドじゃあないんだからさ…」
頼りにならない担当者、明らかに自動車免許の感覚でやってきている大半の被験生、それにのこのこついて来る過保護な親、そしてなにより、そんな連中に頼らなければ資金難で頓挫していた自分にやり場のない感情を抱いていた。

一話（3）（前書き）

一話（2）の最後の方にミスがあったので少し直しました

一話（3）

そしてリニアは遮断層を通り抜けてドームの敷地内に到着した。
そこにはおそらくは大規模な百貨店を三つ繋げたような面積のビルが構えていた。しかし、
「博士」
「なんですか」
博士は桜田に呼ばれて振り返った。
「ビルが一つ以外何もありませんけど…」
桜田のこの発言に、博士はさぞ不思議そうな顔をしたあと、
「更地ですよ」
実に簡潔に答えた。
「さ、更地って、ドーム内の地図とまるで違いますよ！？」
博士は桜田の発言を反芻して、ようやく彼が何を言いたいのか悟ると、後ろに気づかれない程度にウンザリした顔をしてみせた。
「桜田さん、本当にろくに下調べしていないんですね」
桜田はその様子にギョッとして、自分はとても大変なミスを犯してしまったのか、と恐縮した。
「えっとその…すみません」
「はぁ…そうですか」
博士はそんな桜田にほとほと呆れながら、桜田からさらに後ろの人だかりに目を向け呼び掛けた。
「皆さんは、このドームについて、調べていますね？」
途端に人だかりはザワザワと慌ただしくなりはじめる。
様子を見るに、調べていた人数は全体の半分程であろう事を確認すると、博士は頭を抱えたい気持ちでいっぱいになった。
「…それでは、皆さんにおさらいも兼ねてこのドームの説明をいたします」
〈施設〉は簡単に言えば、上に行く事ができた人々の娯楽の為に比

較的初期に建設されたドームである。
主に内に存在する巨大なグラウンド等の運動用の区画と高級住宅等の生活用の区画、レジャーランド等の娯楽用区画から成り立つはずであった。
しかし、プラントの技術の発掘が進み、また〈黒い雪〉の存在が明らかになるにつれて開発が放棄されて管理もろくにされておらず、もっぱら博士と、彼に使いっぱしりとして呼ばれたドームにも入れなかった一部の根城と化していた。
そのため最初に作られていた住宅用ビル以外はほとんど更地に近かったが、その方が実験にも都合が良いためあえて放置されていた、というわけである。
一通り説明を済ませた後、博士はこれまたウンザリした顔をして、
「…調べておけよなぁ」
こっそりつぶやいた。

施設の元生活用区画に到着した後、博士は会議室でこれまた半ばおさらいに近い形で自らの研究の説明をした。
今回の責任者の桜田がロイを知らなかったことはまだしも、ドーム内の状況も知らなかったということで、どうせ保護者も資料になど目を通してもいないだろうと踏んだのだ。
今回の責任者の桜田がロイを知らなかったということで、どうせ保護者も資料になど目を通してもいないだろうと踏んだのだ。
「私が発表した今回の駆動機関のコンセプト、それは〈人と機械の一体化〉です。」博士はホワイトボードに描かれた人と巨人の絵を教鞭で交互にさした。
そして、頭頂部に無数のチューブが繋がったフルフェースヘルメットを机から取り出すと、スッポリとかぶりながら説明を続けた。
「中心部、つまり人でいう心臓に位置するコクピットに搭乗したパイロットはこのヘルメットを装着します。」
そして、ヘルメットに繋がっていた物より若干細いチューブと小瓶

二本を手にとりながら説明を続ける。
「こちらの瓶の中身は、一つは水銀、もう一つは医療用ナノマシンに私が少し手を加えた物です。」
そして小瓶のナノマシンを水銀の小瓶に流し込んだ。
「その二つを混ぜて、瓶越しに強く握ると、まるで化学反応を起こしたかのように急激に移動する――これが私が今回の駆動機械を作る要因の一つになった発見でした」
ここでピタリと説明を止めると、博士は少し照れ臭そうな顔をした。
「いやあ、ここから先を説明すると１０数年前ならば『馬鹿馬鹿しい』だの『オカルトだ！』だの相手にもされなかったのですが…何たって巨大な要塞都市が浮かび上がり、太陽光と少しの管理だけで様々な物を生産してみせるプラントなんて物もあります、構いませんよね？」
すると奥の席から一人の男性が立ち上がった。
「構わないよ、続けてくれたまえ」
だいたい５～６０の中年といったところで、鋭い赤い目が特徴といえた。
「元はといえば、資料もろくに読まずに来た我々が悪いのだからね」
博士は、この男の言動に少し驚いた。
今日ここに来た保護者達はだいたいが『息子、娘を甘やかしに来た』迷惑な連中だと半分偏見を抱いていたため、ストレートに非を認めるとは思いもしなかったのだ。
博士は男が少し気になったが、許可も得たのでとりあえず気を取り直して説明を続ける事にした。
「では、続きを」
そして深呼吸をすると再び彼らに向き直る。
「――つまり、これは人の意志に反応していたのです」
一瞬、会議室は静まり返り、そして先程以上のざわつきに包まれた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6167y/

天地物語

2011年11月28日02時51分発行